

【第八回】「毛筆の基礎・基本とその書き方」

— 実力向上のための学びの指標（段位認定試験の課題に学ぶ②） —

静岡大学教授  
本誌手本揮毫者

杉崎 哲子

◇はじめに

前回から、学びの指標として、段位認定試験の課題の意図に触れています。漢字の楷書・行書の臨書課題に関わる学習の進め方について、ご理解いただけたでしょうか。

では、仮名についてはどうかというと、段位によって、ねらいには、かなり差があります。順を追って確認していきましょう。

■仮名学習のスタート

本格的に仮名の学習をはじめたい方から、よく「仮名は漢字を学習し終えてから習うべきですか」と、学習のスタート時期を心配される質

問が寄せられます。

おそらく、小学校の時などに、大筆で漢字を書いた後にそのまま大筆で平仮名を書いてきた経験があるからでしょう。

しかし、仮名には漢字とは異なる独特の動きや呼吸がありますので、漢字を長く継続して学習してきたからといって、仮名の学習がある程度進んでいるということにはなりません。あくまでも「仮名は仮名の初歩から習う」ものです。言い換えれば、「仮名の学習は、漢字を習い終えてからでないといけないものではない」ということです。

だからといって、早い段階で、漢字だけ、または仮名だけというように、学習の範囲を絞るこむ学習は、避けた方が賢明です。漢字にも仮名にも取り組むのは大変だと思われがちですが、漢字の書、仮名の書の両方の学習に取り組むこ

とは、筆使いや臨書の姿勢を確認するうえでも、大いに意味のあることです。

一通り学習を進められてからは、ご自分の表現活動の中心を漢字の書にされるか、あるいは、仮名を専門に取り組まれるかを選択されることになるかもしれません。

また、漢字学習は取り組むべき古典がたくさんあるので、それに追われ、仮名学習は後回しという方もおられるでしょう。しかし、特に、指導的な立場を目指す（既に指導者になられている）方には、基盤的な技能の習得に必要であることを自覚して、仮名学習にも取り組んでいただきたいと思います。

■段位認定試験の仮名の課題

本誌の段位認定試験は、基盤的な学習の確認

をし、その後の学びの指標になるように、課題を設定しています。ですから、試験では、仮名だけが課されるということはありません。また、漢字だけを学習すればよいということでもありません。なぜなら、月例の競書の段位制度も、現行の学校教育の高等学校芸術科書道の目指す視点に準じ、「総合的に書についての理解を図る」ことを意識し、基準にして展開しているからです。

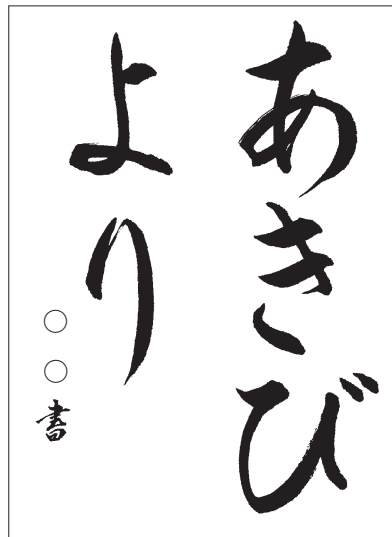
長い歴史の中で継承されてきた文字文化を理解するということになると、当然ながら、漢字の様々な書体や仮名、そして漢字仮名交じりの書についても学習する必要性が生じてきます。書文化教育の担い手となることを目指される方には、その点を自覚し、まずは試験を指標として、総合的に学んでいただきたいと思えます。

(1)初段の課題(創作/現代仮名・単体)

それでは、ここで過去の仮名の課題をみていきましよう。

初段では、「ひがんばん」「しのぶぐさ」といった五文字程度の語句が出題されています。

半紙に収めるため、仮名の古筆を書く時に使う小筆で書いたのでは、線が細すぎて紙面を押しさえきれません。大筆(または中筆)で、筆先をよく動かして書くとういでしょう。



参考：初段受験優秀作品(創作/現代仮名・単体)

二つの優秀作品を見ると分かる通り、初段では、平仮名一字一字の形が正確にとらえられていることが問われます。

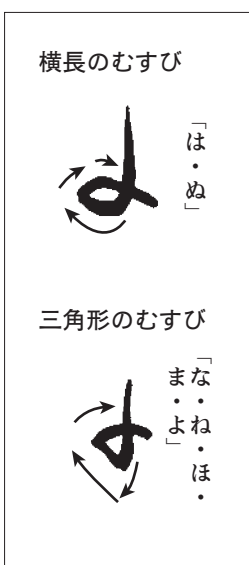
線質についてみると、「しのぶぐさ」の方は筆の入れ方が楷書の点画の起筆に共通しているので、「楷書に調和する仮名」という形でまとめられているということが出来ます。それに対して、「あきびより」の方は、柔らかな入筆の仕方から、「行書に調和する仮名」という感じがします。

「楷書に調和する仮名」は、小学校国語科書写でも扱いますが、「行書に調和する仮名」は、中学校になってから国語科書写の時間に学習します。平仮名は、漢字の草書がもとになって誕生したということを考えると、行書に調和するような柔らかな筆使いで書く方が自然です。

ここで注意すべきは、「むすび」の形です。小学校の書写の検定教科書では全てのむすびを「横長のむすび」に統一し、書きやすさを優先して教えています。しかし、字源を理解していれば、「は(波)」「ぬ(奴)」は「横長のむすび」、「な(奈)」「ほ(保)」は「三角形のむすび」というように区別して書くのが自然で、中学校国語科書写では、これを意識してむすびを使い分けています。

例えば、「は」のむすびを三角に、「な」や「ほ」を横長のむすびにして書いたとしたら、字源を全く無視したことになってしまいますので、十分に注意してください。

むすび二種



なお、課題は「現代仮名」ということになっていますが、その出来栄<sup>できばえ</sup>が、「小・中学生レベル」で留ま<sup>とど</sup>ま<sup>ま</sup>って<sup>て</sup>は困ります。「現代仮名」の字形がしっかりと書けるといふことは、この先の仮名の学習を進めていくうえでの最低条件（基礎・基本の定着）に値するからです。

このように、ここで図られる必要な知識と基礎的な技能は、二段以上の段位の方の学習に生きてきますので、身を引き締めて取り組まれることを望みます。

ところで、過去の段位認定試験の審査の際、仮名の課題について、福島林<sup>りん</sup>邨<sup>そん</sup>先生が、「落款<sup>らくかん</sup>が稚拙<sup>ちせつ</sup>で作品の効果を失したものがあつた」と

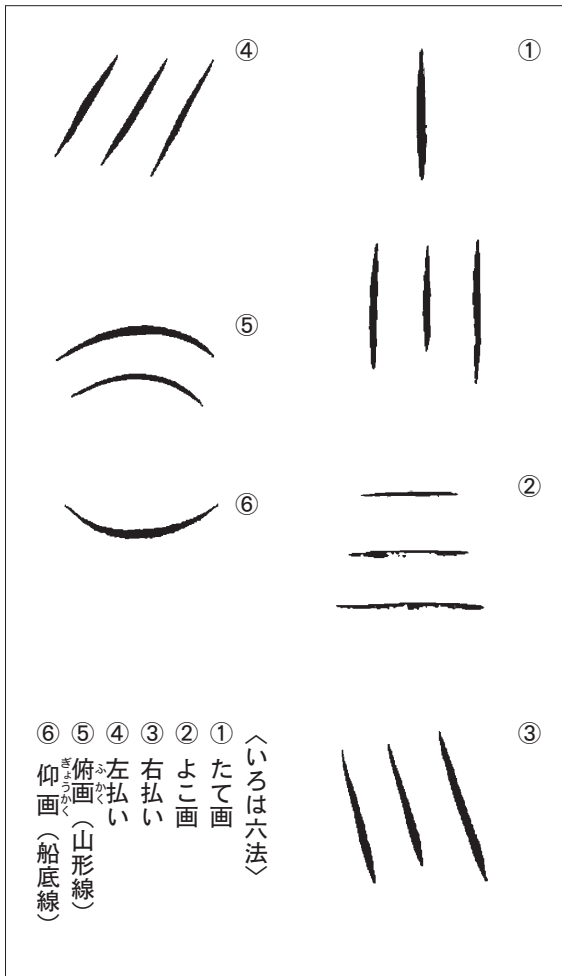
いう講評を寄せられたことがあります。平仮名五文字の中に氏名の漢字が入ってくるわけですから、目立つのは当然です。

落款も含め、その紙面全体が「作品」として評価されるということを意識して書きまとめる必要があるのは、漢字と同様です。

## (2) 二段以上の課題（古筆の臨書）

二段以上の仮名の課題には、傾向として、古筆の臨書が挙げられます。「古筆」とは、昔の優れた筆跡という意味で、仮名の古典に対して使います。この「古筆」は、ただ鑑賞するだけでも仮名の書の伝統を認識するうえで大に意味がありますが、

（参考／『書道《かな》』伊藤鳳雲著、昭和59年、日本放送出版協会）より抜粋



〈いろは六法〉

- ① たて画
- ② よこ画
- ③ 右払い
- ④ 左払い
- ⑤ 俯画（山形線）
- ⑥ 仰画（船底線）

ご自分の書の幅

を上げ高める栄養源として「臨書」を楽しむ、

古筆を味わって

いただきたいと思います。

二段の課題には、「高野切」

（伝紀貫之）の特に「第三種」

が多く取り上げ

られています。高等学校芸術科書道の検定教科書「書道Ⅰ」の仮名の臨書学習でも、端正な仮名文字で書かれ、軽快で明るい書風、単純化され美しい流れの線で有名な「第三種」が多く扱われています。

三段には、漢字仮名交じりの書の創作が入って、仮名の課題（古筆の臨書）はありませんが、四段以上は、「粘葉本和漢朗詠集」（伝藤原行成）、「関戸本古今集」（伝藤原行成）、「寸松庵色紙」（伝紀貫之）等、仮名古筆の臨書が課せられます。

ただし、古筆の臨書とは、課題になっている古筆をよく見れば、いきなり書けるようになるというものではありません。

書家の伊藤鳳雲先生は、仮名の基本線を「いろは六法」といわれ、この六つの基本線を使えば、「いろは…」の四十八字がみな組み立てられ、全ての仮名の単体が楽に書けると述べられています（上図参照）。

まずは、これを練習しましょう。

## ■ 仮名学習（古筆の臨書）の進め方

仮名の学習には、それに合った文房四宝をそろえる必要があります。漢字学習の時とは、特に筆、墨、紙が違いますので注意しましょう。

(1) 筆

一般的に、小字の仮名を書く時には、穂先の直径が6ミリほどの筆を使います。仮名文字を書くには穂先の弾力が重要になるので、イタチの毛が最も適しているといわれています。また、穂の形としては、墨の含みがよくて線の太さを調整し、細い線も書ける「柳葉筆」がよいでしょう。毛先の鋭い「面相筆」も、毛先の当たりが強くて粘りのある線を書くことができます。



(2) 墨と紙

詳しくは、ここでは省略しますが、仮名は線が細く、三〜四文字と連綿するので、よく伸びる墨汁がよく、その点で油煙墨が最もよく、次に松煙墨とされています。しかし、最近では、どちらも少なくなつて工業煙のものが多く造られています。それであっても、墨液を使わず、固形の墨を丁寧（ていねい）に磨れば墨色が冴（さ）えます。急いで力を入れて磨ると、墨の粒子が荒くなるので墨色がよくなりません。静かに時間をかけて、ゆっくりと柔らかく練ると、つやが出てくると

いわれていますが、濃くし過ぎると、伸びにくいので注意してください。

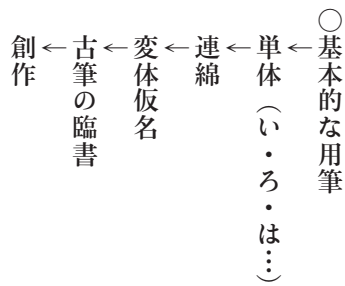
紙は、流麗な線が書けるように、滑らかで墨のにじみが少ないものを選ぶとよいでしょう。

(3) 学習の手順

本誌の現審査部長の加藤東陽先生は、半紙に仮名の古筆を臨書する場合の注意点を次のように説明されています（本誌・平成27年五月号、18頁）

「…字形、筆遣い（線質、用筆・運筆）直線は速く、曲線はゆっくり、転折は一時停止など）、全体構成（紙面に対する配置・配列・文字の大小）を念頭に、一字一字丁寧に分析しながら書いていく…」

詳しくは、競書や仮名について書かれた本誌各連載の記述を見ていただくことにし、学習の手順を以下にまとめておきます。



【仮名の古筆臨書の手順（イメージ）】

